



内藤尚賢『古方薬品考』に描かれた人參

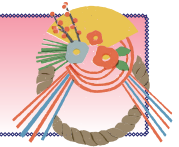
## 人參 (ニンジン)

人參はオタネニンジンの細根を除いた根又はこれを軽く湯通しした生薬です。特異なおいがあり、噛むと初め僅かに甘く、後にやや苦い味がします。黄色を呈する潤いのある紡錘形の太く重いものが上等とされています。中国古代の薬物書『神農本草經』では「五臓を補い、精神を安んじ、魂魄を定め、驚悸を止め、邪気を除く。」「久服せば、身を軽くし、年を延ぶ。」などとされ、十全大補湯、大建中湯、補中益氣湯、六君子湯などに配合されています。朝鮮半島に自生する特産物として朝鮮人參、高麗人參などと呼ばれていましたが、江戸時代、幕府の薬園で栽培化に成功しました。

(副所長 小林義典)

## 新年のごあいさつ

北里大学東洋医学総合研究所 所長 小田口 浩



新年あけましておめでとうございます。本年一年が皆様にとりまして実りある年となりますよう、祈念申し上げます。

さて、1972年(昭和47)年6月27日に設立された北里大学東洋医学総合研究所(以下、東医研と呼ばせていただきます)は今年、50周年を迎えます。職員一同、これまでの長きにわたり我々の活動を支えてくださった多くの方々に深く感謝するとともに、これから先も「東洋医学の叡智を極め、漢方鍼灸医療を通じて笑顔あふれる社会を実現する」という理念に向けて前進していく決意を新たにす所存です。

ここで50年前を振り返り、東医研の設立経緯をご紹介します。江戸時代、巷には多くの漢方医がいて、種々の病気やけがの治療にあたっていました。ところが明治維新後、日本政府は文明開化の名の下に積極的に西洋文明をとり入れ、その反動で日本土着の習俗等は排除する傾向が顕著となりました。その流れが医学領域にもおよび、西洋医学を学んだ者だけが医師となることのできる制度ができあがりました。その結果、従来の漢方医は、当時存在した一世代限りで消滅することになり、漢方医学は著しく廃れ、消滅の危機に瀕していました。ただ、そんな中でも漢方の必要性を感じ、

その灯火を消さずに承継した先人がいて、昭和に入って共感する医師たちがその火を大きくし、第二次世界大戦をはさんで漢方復興のうねりがどんどん大きくなりました。そうはいつでも漢方が日陰の存在であることに変わりはありませんでしたが、1957年から25年間にわたって日本医師会長職を務めた武見太郎先生が状況を変えました。武見先生は、患者さんを救うという理想の前には西洋医学も東洋医学もないと考え、知人であった大塚敬節先生を支援し、日本で最初の東洋医学の総合的な診療・研究機関として東医研を設立することに尽力しました。大塚敬節先生は東医研の初代所長です。このように設立された東医研には漢方医学復興に携わった多くの医療関係者・研究者が集まり、以後現在に至るまでの50年間、一貫して質の高い漢方・鍼灸医療の提供と東洋医学の発展に資する研究を行なってきました。

東医研設立のころと異なり、現在では漢方・鍼灸医療が広く普及し、巷にも漢方のクリニックや鍼灸治療施設が増えてきております。ただ、東医研のように種々の研究結果を診療内容に反映させて、本来あるべき形の漢方・鍼灸診療を行なっている施設はほとんどないと自負しております。たとえば東医研の漢方診療では、精神状態を含めた個々の患者様

の全身状態を漢方医学的に把握し、その状態に応じて生薬量などを調整して治療する、本来の完全オーダーメイド医療を提供しております。さらに患者様に提供する漢方薬についても、日々更新される研究結果に基づき、効果が高くかつ安全性も高い生薬を原料として採用しております。我々はこの50年間積み上げてきた実績に慢心することなく、これから先も

皆様にとって真に役立つ施設であり続けるために前進して参る所存です。

なお、ひとつ皆様にご覧いただけます。東医研50周年誌に患者様から東医研への応援メッセージを掲載予定です。一言でも結構ですのでメッセージをお寄せいただけますと幸いです。詳しくは待合室の案内等をご覧ください。

## 『外来担当のごあいさつ』

漢方診療部 三橋成輝



2021年12月より外来を担当しております三橋と申します。2000年に信州大学を卒業後、脳神経内科領域を中心に研鑽し、この数年は訪問診療医として神経難病をはじめとしたさまざまな在宅患者さんと関わってきました。

難病だけに限らず、疾患とともに道のりを歩むのは心身ともに実に大変なことです。その疾患がなければ「当たり前」にできるはずの多くのことに困難を覚え多大な努力を要し、さらに進行性であればつぎつぎに喪失の苦しさ、悲しさを味わわなければなりません。それは私たちの想像をはるかに超えた苦痛であり、経験を積んだ医療従事者でもなかなか共感しきれないものです。

しかしまた多くの方が傷つき悩みながらもつらさを克服し、新しい自分と共に人生の意味を考え何らかの役割を全うしていこう、と奮闘しておられることも事実です。そうした患者さんの姿にふれる度に人間の持つ強さ・素晴らしさを感じます。

西洋医学の進歩は本当に驚くべきもので、いままで隠れていた仕組みを分析的に発見し新たな治療の道を切り開くなどの方法によって効果の高い薬を次々と世に送りだし福音がもたらされています。そうした薬やりハビリ、環境整備などを通じ患者さんがより質の高い生活を送れるよう微力ながらサポートしてきましたが、一方で西洋医学的な手法だけでは

軽減しがたいつらさがあるのも事実です。また若い方から年配の方まで、健診では特にこれといって異常がないといわれたものの様々な不調を抱えている方もたくさんおられます。西洋医学的尺度で異常がなければ基本的に治療の必要はないと判断するので、それが改善するかも知れない症状だとは思わずにあきらめて生活されている方もいます。

漢方は少なくとも2千年以上の風雪に耐えて生き残ってきた治療法です。多くの疫病にも立ち向かってきました。環境や働き方の変化などで新たに生まれた疾患もありますが、人間の体の仕組みそのものはこの2千年で大きく変わってはいません。生薬の選び方・加工の仕方・組み合わせ方、その精巧な仕組みには驚かざるを得ません。そこに至るまでのおそらくたくさんの失敗や反省もふまえた数限りない経験知の集積、実地検証の中で育まれ洗練されてきた漢方には、現代科学とはまた別の安定感・信頼感があります。そして未病、今は明らかな異常ではないけれどそのままにしていると将来体を壊してしまうことになるような状態を積極的に改善しようとすることもまた漢方の大きな魅力です。

いずれの方法であれ、よくなる場合は速やかによくなりますし、体質改善で徐々によくなる場合もあります。しかしそうではないことも臨床の現場ではやはりよくあります。

まずできる限りよくしたい。もしそれが難しい場合でも、では何か他に患者さんの人生の質を上げる方法はないか、という視点で西洋医学的な方法とも協力しながら日々の診療に当たってまいります。

## 生薬豆知識 オタネニンジン

副所長・薬剤部門長 小林 義典



人参の基原植物であるオタネニンジンとは、ロシアの沿海州、中国東北部、朝鮮半島原産のウコギ科の多年生草本です。人参栽培では4～6年生植物から肥大して分枝した主根を収穫します。人参の茎は単一で直立し頂部に掌状複葉を毎年1葉ずつ増して輪生するので、葉の数を見れば何年生か判ります。3年生以降は毎年5月に茎頂から花茎を出しますが、生薬生産では、根を太らせるために摘花します。繁殖は、4～5年生の生育の良い株を開花させ、7月下旬に紅熟した直径5-9mmの果実から採種します。オタネニンジンとは御種人参と書きますが、これは江戸幕府による生薬国産化事業の中で、輸入に頼っていた人参の栽培に成功し、幕府が種子を下賜したことに由来します。三代将軍家光は大宝令の薬園制度〔典薬寮の中に薬園師二人（正八位上）、薬園生六人、その他薬戸を置いて薬草を栽培する制度〕の復古を目指して薬園の整備を進め、後に八代将軍吉宗は享保の改革で薬草栽培を奨励しました。そして享保8年（1723）に佐渡で佐渡奉行が栽培した人参苗4株のうち長谷寺境内に移植したものが活着し、数年にわたって種子を得ることに成功しました。さらに、石台を利用した屋内発芽法による恒常的な人参苗の育成法を確立し、享保20年（1735）には幕府から表彰されています。一方、人参の農業的生産は、幕府の採薬師であった植村佐平次らの監督下、日光神領で成功しました。元文年間（1736-1741）には幕府から人参種子と官府書付の『人参培養法』が分与され、栽培研究がさらに進んで、田村藍水の『朝鮮人参耕作記』や平賀源内の『人参培養法』『増補人参培養法』は全国的な栽培指針となりました。

ところで皆さん、日本に現存する最古の人参は

どこにあるか、ご存じでしょうか？ 答えは、正倉院です。天平勝宝8年（756）、光明皇后は、聖武天皇の四十九日に「病に苦しんでいる人のために必要に応じて薬物を用い、服せば万病ごとごとく除かれ、干苦すべてが救われ、夭折することがないように」と願い、薬物60種を東大寺の盧舎那仏に献納しました。その際の目録が『東大寺献物帳 種々薬帳』で、人参544斤7両（121kg）の記載があります。これら60種の薬物うち38種が現存し、人参、甘草、大黄などの生薬は今でも薬効成分が残っていたと1994～1995年の柴田承二教授らによる第二次学術調査で報告されています。なお、これらの生薬の中には天平勝宝6年（754）に来朝した鑑真和上が献上したものも含まれていると考えられます。人参の植物図を掲載する古い文献も残っています。日本で最も古い文献は、杏雨書屋（大阪 道修町）が所蔵する国の重要文化財『薬種抄』です。これは平安時代の成連房兼意の撰とされ、保元元年（1156）に書写され、京都の醍醐寺遍智院に伝来した巻物で、人参の図と本文は『重広補注神農本草并図経』から引用されたと考えられています。



オタネニンジン

## ツボの効用

## しんけつ 神闕

鍼灸診療部 近藤 亜沙



「かくれ家や 猫にもすえる 二日灸」

彼の有名な小林一茶の俳句です。また、正岡子規は「死はいやぞ 其ささらぎの 二日灸」と詠んでいます。この2つに共通しているのは、二日灸という季語です。二日灸とは、旧暦2月2日に灸を据えることで、通常の2倍効果があり、無病息災で暮らせると言われています。ちなみに、2022年の旧暦2月2日は、新暦の3月4日に当たります。そこで今回は、寒いこの季節に、3月4日以外でも試して頂きたい灸のツボを紹介します。

ツボの名前は神闕で、ちょうどへその位置に当たります（図1）。臍帯は、胎児が母親から栄養や酸素をもらっている唯一の通り道で、とても大切なものです。しかし、生まれた瞬間から不要なものとなり、切り取られてしまいます。その名残がへそです。へそは漢字では「臍」と書きますが、「臍」とは「齊」の字に通じ、身体を中心点という意味です。へそのできる過程を考えれば、先天の原気、すなわち生命エネルギーの根元が入りする所と解釈することができます。神闕の

「闕」の字は宮殿の門や、天子のいるところという意味があります。別名臍中とも言います。主治は、脳溢血、腸鳴、腹痛、下痢、不妊症などです。身体を中心にあり、名前に神がつくので、かなり重要な経穴であることが想像できますが、古くから禁鍼穴とされ、鍼を刺すことはできません。そこで、この部位を刺激する良い方法がお灸です。へそに直接灸を据えることはできないので、塩やショウガやんにんにくを隔てる隔物灸が最適です。

塩灸は、皮膚の上に和紙やガーゼを敷き、塩を5~7mm程度盛り上げ、その上にもぐさを置いて、燃烧させます。当科では、竹筒の下面をガーゼでカバーし、その中に塩を敷いて、もぐさを乗せています(図2)。塩は精製されたものよりも、マグネシウムを多く含む粗塩の方が効果的だと言われています。生姜灸やんにんにく灸は、3~5mmの厚さにスライスして、その上にもぐ

さをのせて、火をつけます。「雷様におへそを取られる」と言いますが、これは雷が鳴った時に、前かがみになって避難することの重要性の他に、急に気温が下がって、冷たい風が吹くことから、お腹を冷やさないように気をつけなさいということを行っているそうです。このように、お腹を温めることは昔から大事にされてきました。

直接肌に据えるものや、筒状の間接灸に比べると、塩灸の熱はマイルドでとても心地よいです。乾燥する季節ですので、火の扱いには十分注意してやってみてください。

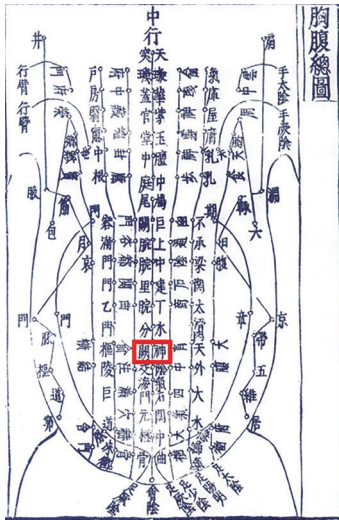


図1 『類経図翼』

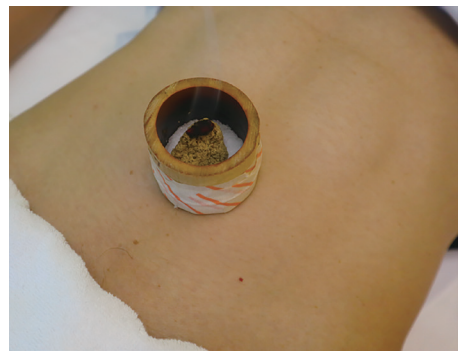


図2 塩灸

東洋医学総合研究所 漢方鍼灸治療センター 外来案内

休診日：日曜日・祝祭日・年末年始(12/29~1/3)  
ホームページ：http://www.kitasato-u.ac.jp/touei-ken/

漢方科 2021年12月1日~						
	月	火	水	木	金	土
午前	花輪 <sup>①</sup> 星野 石毛 森(裕)★	花輪 鈴木 森(裕) 【冷え症外来】 伊藤(剛) <sup>②</sup> 石毛★	花輪 <sup>③</sup> 川鍋 石毛 中尾	花輪 小田口 川鍋 森(瑛)	伊藤(剛) 鈴木 星野 森(裕)	小田口 <sup>⑤</sup> 及川 <sup>⑤</sup> 鈴木 <sup>⑤</sup> 星野 <sup>⑤</sup> 森(裕) <sup>⑤</sup> 川鍋 <sup>⑤</sup> 石毛 <sup>⑤</sup>
午後	森(裕) 川鍋 【冷え症外来】 鈴木	伊藤(剛) 鈴木 伊東 三橋	星野 川鍋 石毛	小田口 及川 <sup>④</sup> 五野 中尾 川鍋★	星野 森(裕) 伊東 鈴木★	

鍼灸科 2021年12月1日~						
	月	火	水	木	金	土
午前	伊藤(剛) 石原 小山	柳澤 井田 石原	石野 井田 石原	伊藤(剛) 伊藤(雄) 小山	伊東 近藤 石原 東川	伊東 <sup>⑦</sup> 井田 <sup>⑦</sup> 伊藤(雄) <sup>⑦</sup> 近藤 <sup>⑦</sup>
午後	井田 近藤 石原 小山	伊藤(雄) 近藤 石原	伊東 伊藤(雄) 近藤 石原	井田 伊藤(雄) 近藤 小山	伊藤(剛) <sup>⑧</sup> 井田 伊藤(雄) 石原	※黒岩休診中

※黒字は男性医師または男性鍼灸師  
赤字は女性医師または女性鍼灸師  
※専門外来では一般の患者様の診療も行っています。  
※★印はコロナ後遺症外来  
※黒岩休診中

- ① 月曜日午前の花輪医師の外来は、初診の方のみとさせていただきます。
- ② 火曜日午前(第1・3)の伊藤(剛)医師の冷え症外来は、初診のみとさせていただきます。
- ③ 水曜日午前の花輪医師の外来は、第2水曜日を休診とさせていただきます。
- ④ 木曜日午後の及川医師の外来は、第2木曜日のみとさせていただきます。
- ⑤ 土曜日の外来は、交代制となります。スケジュールはホームページまたは予約電話へお問合せください。
- ⑥ 金曜日午後の伊藤(剛)医師の外来は、毎月第1・2・3金曜日のみとさせていただきます。
- ⑦ 土曜日の外来は、交代制となります。スケジュールはホームページまたは予約電話へお問合せください。

予約電話：03-5791-6169  
(月~金) 8:30~11:00  
及び  
12:00~16:00  
(土曜日) 8:30~11:00  
お薬に関する問い合わせ：  
03-5791-6167  
その他のお問い合わせ  
代表：03-3444-6161

初診受付時間

漢方科	月~金曜日	土曜日(午前のみ)
午前	8:00~10:30	8:00~10:30
午後	12:50~15:00	

鍼灸科	月~金曜日	土曜日(午前のみ)
午前	8:00~10:00	8:00~10:30
午後	12:50~14:30	

再診受付時間

漢方・鍼灸	月~金曜日	土曜日(午前のみ)
午前	8:00~11:00	8:00~11:30(鍼灸) 8:00~12:00(漢方)
午後	12:50~15:30	

漢方ドック

月~金曜日(完全予約制)
9:00~15:30



WEBサイト